

④ きちんと守らせませす

昭和 35 年 4 月、教員生活 3 年目の春を迎えました。この年、担任を命じられたのは 1 クラスしかない 6 年生、54 人という今では考えられない多人数学級でした。また、最上級生の 6 年生には学校生活の中でいろいろな仕事を与えられます。当然、私がかかわらねばならない仕事が増えました。でも、この学年をもたせていただくことは、ちょっと一人前に近づいたのかなとうれしい気持ちのする日々でした。

大きな行事である修学旅行がやってきました。近ごろでは、大手の旅行会社が修学旅行の企画立案実施を引き受けてくれます。どこが請け負うかという競争があり、このことに起因する問題が起こったりしたことも聞きました。けれども、対象となる児童が 54 人という山の小さな学校に、そんな働きかけはありませんでした。すべてがたった 1 人の担任である私の仕事でした。

目的地は京都と大阪でした。学校から三重県の名張までは貸し切りバス、名張から桜井までは近鉄、そこから京都までは国鉄（なつかしい言葉になりました）、市電を使って京都市内を見学した後は、京阪電車で大阪へ、旅館までは地下鉄に乗り、翌日は観光バスも使って大阪市内の見学、上本町から名張へは近鉄で、そしてバスで帰るという旅です。「なんと盛り沢山な」と驚かされます。まだ夜の明けない時間に出発し、真っ暗になってから帰ってくる、それが、そうそう簡単には町に出かけられない山村の学校の修学旅行でした。

5 月 12 日、名張から電車に乗りました。「すごい」「速い」と驚く子どもたち、電車に乗るのが初めてという子どもが結構いました。ここでは、先輩に「必ず持っていきなさい」と言われていた古新聞が役にたちました。車酔いで嘔吐を繰り返す子どもたちがいっぱいでした。

私は車内の清掃係になりました。

桜井からは国鉄に乗り換えます。子どもたちの人数を確認し校長先生に報告、私は出札口で切符を申し込みました。

「団体旅行は予め天王寺鉄道管理局に申し込んでいただくことになっています」

冷たい返事だと思ったのは田舎の小さな学校の教員のひがみだったのでしょうか。

「いいですよ。1人1人に切符を買わせます。汽車に乗ったことのない子どもたちにとって又とない勉強ですから」

あわてた駅員からは「団体切符を売りますから」という返事がありました。できれば1人1人に切符を買わせたいと思いました。「いいえ、結構です。1人1人に売ってやってください」と言いました。しかし、「時間がありませんから」という駅員の言葉に団体切符でがまんすることにしました。すでに蒸気機関車に引かれた対向列車が到着、煙を上げていたのです。

京都行きのこの車内で、私は前々から考えていたことを実行しました。それは、約束の金額以上の小遣いを取り上げることでした。このことは私にとって大きな決断を要することでした。お小遣いとはいつでも親の与えたものではありません。親戚や近所の方からの餞別なのです。大阪のような遠い町に出かける人に餞別を差し上げるというのはこの村の常識でした。私の行動はこの村の常識を否定することだったのです。

子どもたちから預かった小遣いは2万円を超えました。それは、私の給料手取り月額の2.5倍以上でした。途中で「先生、無くなりましたから返してください」と言ってくる子どももいました。こうした子どもたちに囲まれ、多勢に無勢の私は、同行の先輩であるI先生に相

談してみました。この村に生まれこの村でお勤めになっている先生です。こうしたしきたりを十分にご存じの先生のお答えは、

「自分がそう決めた以上は、最後までそうしたらいいでしょう」というものでした。ある種の冷厳さを感じた答えでしたが、今から考えると、後輩の私に、いったん決めたことはきちんとやり遂げることの大切さをお教えいただいたのです。ありがたいことでした。

しかし、そんなふうに考えることができたのはずいぶん後になってからのことでした。ほんとうに、これで良かったのだろうか。自問自答しながら真っ暗になった村に戻りました。お迎えの保護者がいっぱいでした。旅の概要を報告し、車中で違反のお小遣いを取り上げたことについて説明しました。これだけでは十分に理解していただけないと感じた私は、すぐ学校に行き、明日の返金に添えて渡す学級だより「でんしょぼと」の作製にとりかかりました。これには、次のように書いています。

.....

好天に恵まれことしの京都・大阪方面修学旅行は、1名の事故者もなく、無事神末に帰着しました。ほんとうにいい天気です。暑すぎたくらいでしたが、東山からの京都の展望、明るく光る金閣、おちついた京都御所、赤く明るい平安神宮、ゾウ、ライオン、カバなどを見た動物園、ネオンにかがやく夜の道頓堀、通天閣からの眺め、大阪城、大小の船と造船所を眺めての昼食、毎日新聞社の見学等々、子どもたちの印象に残ったものは数多かったです。また、通天閣では、チューインガム、香水、占いの自動販売機などオートメーションを身近に感じたようです。

とにかく、楽しく、元気に、そして、いろいろと勉強して帰って来ました。子どもたちが、目で見、耳で聞いたことが子どもたちの頭の

中にいっぱい詰まっていることと思います。おみやげには、この話を聞いてあげてください。おこづかいのこと、みんなで決めたみんなの約束を守るために、行きがけの車中で、余分を集めさせていただきました。これは、きょうお返ししました。一応、子どもたちのお金だと思えます。ご家庭でも使い道について相談にのってあげてください。私も、相談をおうけします。おこづかい相談所へどうぞ

.....

ガリ版刷りの学級だよりの印刷を終え、下宿に戻りました。やれやれと思ったのも束の間、「Tちゃんが来はったで」という下宿のおばさんの声が聞こえました。Tちゃんというのは6年の元気なK君の元気な元気なお父さん、そしてちょっとやんちゃなお父さんのニックネームでした。ほろ酔いのTちゃんは一升瓶を肩に担いでいました。

「先生、えらいええことしてくれてんなあ」
私は思わず緊張しました。下宿のおばさんの不安げな顔が目に入りました。

「先生、ええことしてくれたで」

Tちゃんは、餞別をもらった方に適当なお土産を買って帰るのはこの村のしきたりであること、これも勉強であると思うこと、しかし、大変な無駄であると思うこと、先生はそんな習慣を断ち切って、この村から無駄なお金が出ていくことを止めてくれたんだ、と話してくれました。

「せやけど、お返しを何にするか、これから考えやんなんけどな」
と言うTちゃんの顔は笑っていました。

緊張と不安は消え、コップ酒を飲みながらの楽しい夜が更けていきました。出発前夜は「娘が急にしんどいと言い出したのです」という連絡での家庭訪問で深夜に帰宅、大阪の旅館では腹痛を訴えた子ども

の看病で徹夜，そんな睡眠不足の私でしたが苦にはならない1夜でした。

この学校を去って10数年が過ぎたころ，当時のS校長先生にお会いする機会がありました。先生からは，「あれから，修学旅行に行くときの小遣いの額はきちんと守るようになってね」というお話を聞きました。うれしいことだと思いました。「楽しい日だから，特別の日だから許してあげる」ではなく，「みんなで決めた約束は守る，どんなことがあっても守らせる」ということが大切だと思います。こんな思い切ったことをしたのは，教員をしていた父が繰り返し話してくれた体験に基づいているようです。

それは，昭和の初めのこと，児童を大阪中央放送局の見学に連れて行ったとき，違反のおやつを持ってきている子どもたちの多いことに気づいた父が，このすべてを取り上げて，局に置いてきたという話でした。このときには，「せっかくのおやつです。堪忍してあげてください」と取りなしてくださった局の方に「いいえ，これは許せません。みんな捨ててください」と言ったのだそうです。

教師としては先輩であり，小学校や中学校では直接授業を受けた先生である父からの話です。それは，あだやおろそかにはできないものでした。それが，約束は守るということに対する厳しい指導をさせたのでしょう。それから小遣いの額の違反は認めませんでした。

長い年月，いろいろな場面，ときには行き過ぎた指導もありました。「これは絶対に許せない」という感情にかられての指導もありました。しかし，法に触れるような指導がなくなるとともに，しだいに厳しさが消え，「まあ，いいか」となっていった自分を振り返ると，少し後ろめたい気がすることも確かです。